



世田谷のまちと暮らしのチカラ ～まちづくりの歩み 50 年

開催報告

2024.1.31 水 — 4.21 日 9:00-21:00

生活文化情報センター生活工房ギャラリー+ワークショップルーム B

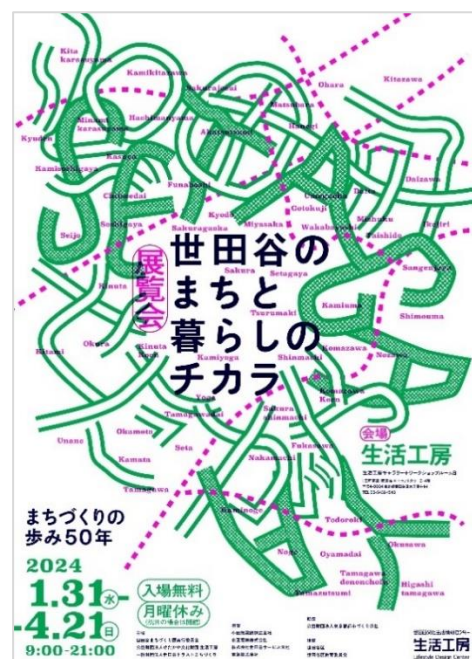
- 02 第1部 まちづくりの空間
- 04 第2部 地形と都市計画
- 05 第3部 グラフィックデザインと都市デザイン
- 08 第4部 ワークショップと道具箱
- 10 第5部 市民のデザイン
- 13 イベント
- 15 謝辞

主催

世田谷まちづくり展実行委員会

公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

一般財団法人世田谷トラストまちづくり



01 まちづくりの空間

まちの空間は、長い時間をかけてつくられ、その空間に支えられて暮らしが展開されます。

50年という長い時間をかけて、世田谷のまちの空間はどのようにつくられ、そこでどのような暮らしが展開されてきたのでしょうか。その時間の長さをまちづくりの年表にまとめました。

1970年代から現在に至るまで、世田谷においてまちと暮らしをよりよいものにしようとする、まちづくりが積み重ねられてきたことがわかるでしょう。

まちの空間には、まちづくりでつくられた、住宅、駅、まちの3つの空間の模型を展示しています。そこにどのような暮らしがあるか、思いを馳せてみてください。



模型 シェア奥沢



この住宅は1925(大正14)年に建てられ、その一部が20年近く空き家として放置されていましたが、2013年に区の空き家等地域貢献活用助成事業によって再生され、2014年に「地域共生のいえ」に登録されました。近隣の方々が参加するさまざまな活動が行われています。

奥沢2丁目のあたりは大正末期に開発されたみどり豊かな住宅地で、世田谷区風景づくり条例による「界わい宣言」が締結(2004年)され、「奥沢海軍村ゆかりの風景」として地域風景資産に選ばれました(2007年)。2023年に「奥沢1〜3丁目 界わい形成地区」が制定され、区、町会、住民グループが連係して豊かな住環境を守り育てる仕組みが作られました。一般的な住宅地における、風景づくり条例を活かした街づくりのモデルケースと言えます。

模型 下北沢



下北沢は小田急電鉄と京王電鉄が交差する結節点に発達したまちで、学生のまち、古着のまち、演劇のまち、音楽のまち・・・と、東京の中でも多く語られるまちの一つです。東京の山手に発達した池袋や新宿や渋谷のような中高層、超高層のまちと異なり、下北沢はかつて駅前にあった食品市場をはじめとして、低層の建物が建ち並び、迷路のようなまちの魅力を持っています。

2000年代に入り、小田急電鉄の地下化、都市計画道路の整備、駅前広場の整備という大きな都市計画が地域にもたらされました。その賛否を問うさまざまな市民運動が立ち上がります。下北沢のまちの人たちや、鉄道会社、そして世田谷区はその議論、その変化を丁寧に受け取り、議論を重ねながら現在の下北沢をつくり出しました。

この模型*はその議論の時に使われているもので、世田谷代田と東北沢の駅間の周辺の変化をあらわしたものです。議論も変化もまだ続いているので、まだ現役の模型です。小田急電鉄の線路跡地には「下北線路街」が、京王電鉄の高架下には「ミカン下北」が生まれ、そこでさまざまな市民の活動が展開されています。

*この模型は世田谷区所蔵の「小田急線(代々木上原駅～梅ヶ丘駅間)上部利用施設の模型」を加工したものです。

模型 太子堂 2・3 丁目地区



太子堂 2・3 丁目地区では、1980 年代から「太子堂 2・3 丁目地区街づくり協議会」が中心となった、住民参加型のまちづくりが取り組まれています。木造住宅が密集してはいたものの、穏やかな住宅地であった太子堂では、大きな手術ではなく、暮らしの環境を守り、小さな空間を少しずつ改善していくという修復型の都市デザインの方法がとられました。それは住宅地のまちづくりを展開した世田谷の都市デザインのお手本となっていきました。

まちづくりにより地区を横切る烏山川緑道が整備され、トンボ広場などのユニークで小さな空間が整備されています。地区の住民がみな同じ意見を持っていたわけではありません。協議会が中心となった調査、話し合い、そしてワークショップやイベントを組み合わせ、住民と行政の合意が生まれ、まちが整備されてきました。

模型には地区内 6 ヶ所の小さな空間があらわれています。どこにでもありそうでいて、唯一無二の暮らしの空間が表現されています。

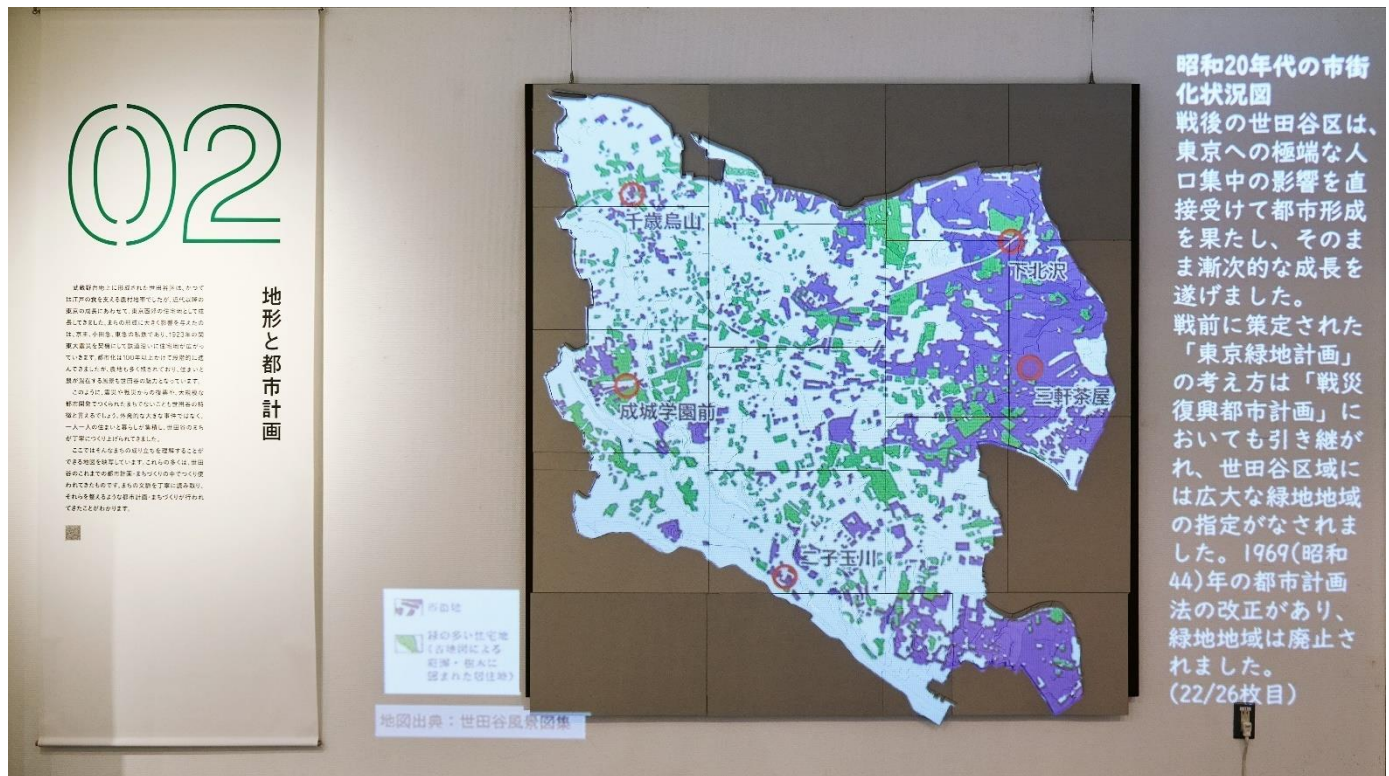


02 地形と都市計画

武蔵野台地上に形成された世田谷区は、かつては江戸の食を支える農村地帯でしたが、近代以降の東京の成長にあわせて、東京西郊の住宅地として成長してきました。まちの形成に大きく影響を与えたのは、京王、小田急、東急の私鉄であり、1923年の関東大震災を契機にして鉄道沿いに住宅地が広がっていきます。都市化は100年以上かけて段階的に進んできましたが、農地も多く残されており、住まいと農が混在する風景も世田谷の魅力となっています。

このように、震災や戦災からの復興や、大規模な都市開発でつくられたまちでないことも世田谷の特徴と言えるでしょう。外発的な大きな事件ではなく、一人一人の住まいと暮らしが集積し、世田谷のまちが丁寧に作り上げられてきました。

ここではそんなまちの成り立ちを理解することができる地図を映写しています。これらの多くは、世田谷のこれまでの都市計画・まちづくりの中で作り使われてきたものです。まちの文脈を丁寧に読み取り、それらを整えるような都市計画・まちづくりが行われてきたことがわかります。



模型 ガリバー地図

かつて市民が地図を使うこと、地図を作ること、それを複製することには大きな労力がかかりました。しかし地図を使わないと、まちの課題を正確に認識したり、議論したりすることができません。ガリバー地図は1988年に中村昌広らが考案した方法で、大きな地図を体育館などの床に敷き、その上に市民が乗って議論するという方法です。この模型は、1988年のガリバー地図を記録から再現したものです。

03 グラフィックデザインと都市デザイン

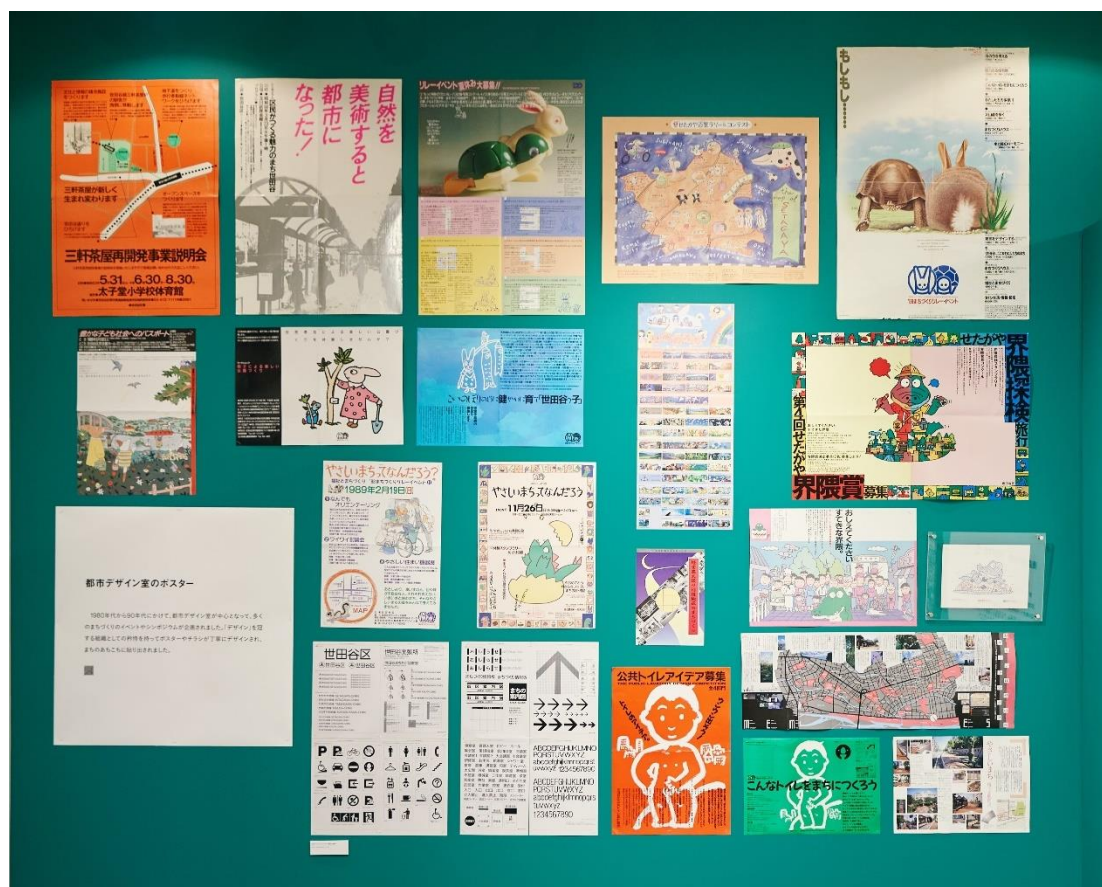
世田谷のまちづくりは1975年の区長公選から始まりました。いわば、自治体としての独立とともに、まちづくりが始まったのです。「都市デザイン」や「都市美」という言葉が掲げられ、世田谷らしい美しさを持った都市のあり方についての模索と実践が始まります。

都市をどう美しくするのか。同じ頃に都市美をかかげた横浜市や神戸市は都心地域を抱え、埋立地やニュータウンなどの大規模開発も予定されていました。しかし住宅地が中心の、海や山というフロンティアもない世田谷の都市デザインは、より小さなもののデザインへと、暮らしに近い空間のデザインへと力を集中していくことになりました。

1982年に設立された都市デザイン室が中心となって、公共サインから、街路、公園、公共施設、駅やバス停、公衆トイレ、木造住宅密集地の住環境、清掃工場の煙突にいたるまで、さまざまなものがデザインされていきます。空間だけでなく、ポスターやさまざまな刊行物も美しくデザインされていきます。

また一方で、デザインの過程への「住民参加」も世田谷の特徴です。それは「世田谷らしさ」を探求する方法であり、自治体としての独立を確かなものにする方法でもありました。

都市デザイン室のポスター



1980年代から90年代にかけて、都市デザイン室が中心となって、多くのまちづくりのイベントやシンポジウムが企画されました。「デザイン」を冠する組織としての矜持を持ってポスターやチラシが丁寧にデザインされ、まちのあちこちに貼り出されました。

商店街の時間 せたがや昔→今



世田谷の仮想の商店街の移り変わりを連続イラストにしたもので、2005年に商店街を語り合うためのテキストとして製作されました。世田谷区、場所づくり研究所プレイス、武蔵野美術大学が協力して、4回のワークショップを区民と開催し、その結果を大橋慶子が5枚のイラストにまとめました。モデルとなったのは千歳烏山の商店街です。



公共のサイン

公共施設やまちの中にあるサインは、誰にでもわかりやすく情報を伝えるよう、丁寧にデザインされたものでなくてはなりません。風景の中で目立ち過ぎない一方で、風景に埋もれないことも重要です。分かりやすさ、美しさ、楽しさ、その地域らしさ、そこでは様々なデザインの可能性が追求されました。1984年にデザインされた道案内のサインは、ネコやタヌキをモチーフにした「カワイイ」もの、いまだに現役で使われているものもあり、この展覧会の案内サインにも使われています。

都市のデザイン

都市デザイン室が調整しながら、公共トイレ、電話ボックス、街路、駅、バス停、区民センター、そして清掃工場の煙突にいたるまで、あちこちでデザインされた公共空間が誕生していきます。そこに民間のデザイナーや建築家も多く起用されます。用賀プロムナード（1986年-）には象設計集団が起用されました。世田谷清掃工場煙突（1988年・紙谷芳彦）、世田谷線宮の坂駅・界限づくり（1990年・野沢正光）、喜多見駅（1997年・みぞぶちかずま）の整備にあたっては、アイデアを募るコンペが行われました。

これらは世田谷らしい都市デザインとはなんだろうか、という問いに答えたものですが、みなさんの目にどう映るでしょうか。



世田谷清掃工場の煙突コンペ



まちの素材



やさしいまちづくり

コンペから市民参加へ

世田谷らしい都市デザインとは何か。その問いを解く方法の一つがコンペです。多くの人から提案を集めて、公開の場で審査し、ふさわしいものを決定していくこの方法は、都市のデザインに民主性を持ち込み、デザインのプロセスに市民を巻き込む方法でもありました。1987年実施の世田谷線宮の坂駅・界限づくりコンペには全国から242件の提案が寄せられました。そこには気鋭の建築家による提案もあれば、市民グループや高校生からの提案もありました。

採用された野沢正光の案は、世田谷線を敷地に引き込むというダイナミックな構成を持つ一方で、連続する三角屋根で施設を町並みに溶け込ませようとするものでした。世田谷区長賞を受賞したFAG205+地域住民グループの案は、市民のアイデアをまとめたパターンランゲージを使って設計されたもので、デザインの民主性を追究したものとして評価できます。コンペの持つ民主性は、第4部の90年代以降の市民参加の流れにつながっていくことになります。



04 ワークショップと道具箱

80年代から90年代にかけて、まちづくりへの住民参加が広がっていきます。それは行政による都市デザインから、住民との共同作業による都市デザインへの変化でした。その変化を支えたのが、まちづくりファンド(1992年)、まちづくりセンター(1992年・現世田谷トラストまちづくり)といった仕組みでした。

まちづくりファンドは住民のまちづくり活動の資金を支援する仕組みであり、世田谷の多くの住民活動を掘り起こしていきました。まちづくりセンターは住民による都市デザインを支援するために設立された専門家組織で、行政と住民をつなぎながら、多くのプロジェクトを実現していきます。

そして、そこに導入されたのが「ワークショップ」と呼ばれる方法です。もともとアメリカで発達した方法が輸入されたものですが、参加者が対等な立場でコミュニケーションし、創造的な結論を導き出していくこの方法は、あっという間に市民の中に浸透し、全国へも広がっていきました。ワークショップは、質の高いまちと暮らしを創造するための、新しいコミュニケーションの方法を求めている人たちのニーズにぴったりと一致したのです。

まちづくりセンターとワークショップの道具箱



世田谷まちづくりセンターは、区民のまちづくりを支援する専門家組織として、世田谷区都市整備公社の係として設立されました。数名の小さな組織としてスタートしますが、ワークショップ手法を片手に、公園の整備、緑道の整備、都市整備方針案の作成など、多くの区民参加のプロジェクトを手がけていきます。

1993～2002年に刊行された4冊の「参加のデザイン道具箱」は、まちづくりセンターで実践されたワークショップ等の方法をまとめたもので、90年代、00年代に日本中で広く読まれ、ワークショップの手法の普及に一役買いました。

実寸ワークショップの風船

西経堂団地の建替えのワークショップで使われた、実寸ワークショップを再現しました。建替えが予定されている土地において、計画されている建物の高さを確認し、議論するために使われたものです。このように実際の寸法をみなで確かめながら、まちの空間がつくられていったのです。





(31年間の助成実績総額 2.5 億円・900 件助成)

世田谷まちづくりファンド は、区、民間企業、区民から資金をあつめた基金をつくり、市民活動に資金的な支援をする仕組みとしてつくられました。運用は公益信託として信託銀行に託され、独立した委員会で運営されます。公開型であることがその特徴で、年に一度の公開審査会に市民が自らの活動の提案を持ち寄ります。そこでは模造紙にまとめられた提案が発表され、参加者が見守るなか、運営委員が模造紙に金額を書き入れ、助成金額が決定されます。このことによって多種多様な市民活動が可視化され、活動同士の連携につながったり政策化につながったこともありました。また、ファンドの運営そのものを支援する市民団体が立ち上がったことも重要なことです。



ファシリテーショングラフィック

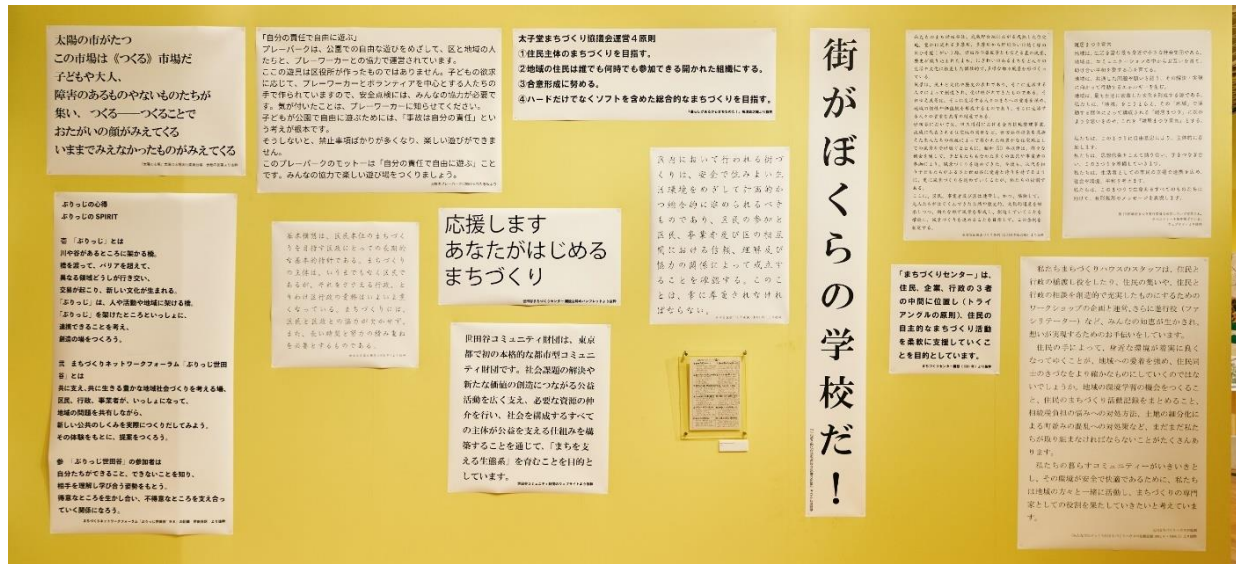
ワークショップの現場などにおいて話し合われたことを、その場でまとめて参加者と共有する「ファシリテーショングラフィック」という技術が世田谷の専門家の中で発達していきます。複雑な、時に混乱する議論の流れをその場でつかみ、分かりやすくまとめていく技術です。ここでは世田谷でも活躍する奥村玄と千葉晋也の二人のプランナーのファシリテーショングラフィックの映像と、まちづくりセンターのスタッフでもあった浅海義治と朝比奈ゆりのファシリテーショングラフィックを展示しています。4人それぞれの方法の違いにも注目してもらうといいでしょう。

ねこじゃらし公園



ワークショップを使った計画づくりのモデルとなったのが、1994 年に完成した奥沢にある「ねこじゃらし公園」です。住民グループや町会からなる「公園を考える会」が計画の中心となり、まちづくりセンターや設計者、市民グループがワークショップをコーディネートしました。「ご近所探検ミニウォークラリー」「デザインゲーム」「使い方シミュレーションゲーム」「原寸確認ワークショップ」といった手法が取り入れられました。完成後は、ワークショップ参加者が設立した「グループねこじゃらし」が公園の運営管理を行っており、コミュニティの組織が組成されたこともワークショップの大きな成果となりました。

まちづくりの言葉



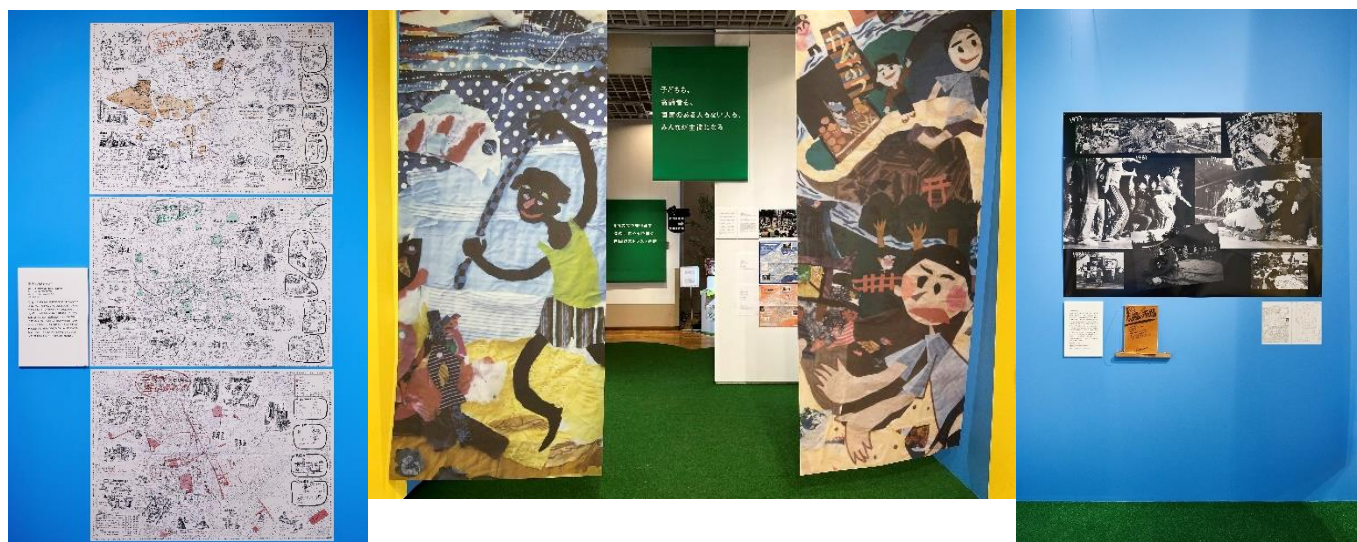
05 市民のデザイン

市民が自分の暮らしの空間をデザインする、自分のまちをデザインする、それは当たり前のように、簡単ではないことかもしれません。都市デザイン、コンペ、住民参加、ワークショップ、ファンド、センター・・・といった取り組みが、50年にわたってかき混ぜ続けた世田谷のまちには、「市民のデザイン」とでもいうべき、そこで暮らす人々の手による、多種多様な、雑多な取り組みがうずまいています。

この展示会の最後のフロアには、世田谷のまちでうずまいている、たくさんの市民のデザインの一端を展示しています。路上、住まい、みどり、遊び場から風景にいたるまで、知恵と工夫に満ちた取り組みをみることができます。ここまで育った「まち」と「暮らし」は、これからどう変わっていくのでしょうか。

やさしいまちづくり 子どもも、高齢者も、障害のある人もない人も、みんなが主役になる

世田谷の「やさしいまちづくり」は1970年代の後半に市民の活動の中から誕生しました。子どもの豊かな遊びの場をとりもどそうと動き出した大人たちと、自立して生活しようとまちに出た障害のある若者たちが出会い、それぞれの活動の魅力がいろいろな人を巻き込んでいきます。「ワークショップ」がそこに新しい参加の手法として導入され、市民は自分の言葉と身体で表現することや、他の人の立場になって体験すること、異なる世代の人どうしが対話しながらつくりあげることの楽しさを手に入れたのです。



まちの宝を守り育て次の世代へ引き継ぐ世田谷のトラスト運動



みどりや水辺などの自然環境や、近代建築などの歴史的文化遺産など、世田谷に残された貴重な環境を守り育て、次世代に引き継いでいく運動がトラスト運動です。年間で延べ7,500人を超えるボランティアの参加によって支えられています。30箇所を超える「市民緑地」や「小さな森」もつくりだされてきました。地域に誇りと愛着を持った市民が主体的に環境保全を進めながら、次世代に引き継ぐために、さまざまな工夫で身近な自然の魅力も伝えています。

風景づくりと地域風景資産 大切にしたい身近な風景を、市民が守り・育て・つくり出す。



区内には、そこに暮らす人々の心に共有され、みんなが誇りと愛着を持っている大切にしたい身近な風景があります。「地域風景資産」は、こうした風景を「守り、育て、つくる」ことを目的に、区が風景を資産として選定する仕組みで、これまで 86 箇所が選定されています。選定の仕組みづくり・候補の推薦・選定、選定方法の見直しなどの過程に多くの市民が関わり、市民参加で「風景づくり活動」を生み出しているのが大きな特徴です。

暮らしをひらく、支える、豊かにする、地域共生のいえづくり



住宅などの所有者が、自身の住まいの一部あるいは全部を地域にひらき、ひととひと、ひととまちをつなげる場とする取り組みは「地域共生のいえ」と呼ばれ、区内 21 箇所地域共生のいえが活動しています。所有者のまちへの想いがカタチとなり、それぞれの暮らしと記憶を重ねた空間で、そのひと、そのいえにしかできない交流の場が生みだされています。各いえの名前にも深い想いが込められています。お近くのいえや関心のあるところにぜひ訪れてみてください。

子どもとまちづくり 地域ぐるみで見守り育む、子どもたちの遊びと育ち



世田谷では、都市部に子どもの遊ぶ場所がないと危機感を抱いた市民の発意で 1979 年に日本初のプレーパークが誕生しました。プレーパークの外にも遊びを広げたいと 2006 年にプレーリヤカーが開発され、各地に出張して遊びの場づくりが行われています。一方で「孤育て」になりがちな親子に対して気軽に訪問できる「おでかけひろば」を各地で運営、子どもたちの成長を見守り育む地域づくりが住民主体で進められています。ぜひ訪れてみてください。

学校からはじまるまちづくり 市民がつくる、新たな地域コミュニティ施設づくりの挑戦



学校はまちの大きな財産です。これまで世田谷では松丘小学校周辺の街づくり、学校をテーマとしたまちづくりコンクールの開催、さらには学校での「地域防災体験サバイバルキャンプ」ワークショップなど、様々な取り組みが行なわれてきました。ここでは、学校をこれからの新たな地域コミュニティの核となる施設に転換した、さくら花見堂(花見堂小学校跡地)、まもりやまテラス(守山小学校の後活用)の取り組みを紹介します。

下北沢のまちづくり

まちが大きく変化するとき、多くの人の関わりしることができます。下北沢を愛する人やチャレンジしたい人たちの想いから生まれた活動をいくつか紹介します。共通するのは、「得意なことを活かしあい」、「自分たちらしく」取り組むことで、まち・自然・人との関係をつなぎなおそうということです。そしていずれも商店街、企業、行政などまちに関わる他者との連携によるということ。下北沢で生まれる素敵なアクションを感じてみてください。



二子玉川 国分寺崖線の緑と多摩川の水辺。自然と都会的便利さが共存するまち



広い空に国分寺崖線の緑が映え、ゆったりとした多摩川の水辺空間がひろがる。二子玉川は日々の暮らしの中で自然がすぐそこにありながら、ショッピングやエンターテインメントなどを楽しめるライフスタイルがあります。新旧住民が住む二子玉川エリアでは、通過交通や新旧住民のコミュニティづくりも大きな課題。こどもの育ちを地域で支え、誰もが安心安全に暮らせるようにと「エリア」全体で様々な取り組みが展開されてきました。

イベント

私の好きな世田谷のまちのキャッチコピーコンクール

小中学生を対象に、30文字のキャッチコピーを募集しました。
入賞・奨励賞の作品はパネルにして、展覧会会場に展示しました。

応募期間 2023.10.10金～11.10金 | 応募総数 71件

表彰式 2024.3.17日 13:00～@生活工房セミナールーム A・B



《入賞 6 作品》

小田急電鉄賞	ダイダラボッチの足の上、富士山望む、世田谷代田駅(たかてつさん・小3)
京王電鉄賞	おいしいたのしいブルーベリー狩り せたがやそだちをとりに行こう(yukaさん・小4)
世田谷サービス公社賞	かけっこ、サッカー、おにごっこ、笑顔あふれる世田谷区!(近藤 美都さん・小3)
世田谷区商店街連合会会長賞	お店がいっぱい! 人がいっぱい! 下北のまち(ななみさん・小3)
東急賞	子どもと花のゆくさを まつかげが見まもる松いん神社(荒井 悠里さん・小2)
世田谷まちづくり展実行委員長賞	たま川だ 虫とり えびとり 魚とり 家ぞくみんなであそべるよ(志村 萌々子さん・小2)

《奨励賞 17作品》

未来の世田谷シンポジウム

現在の活動から見てくる「50年先の世田谷のまちづくり」とは?

4つの事例から、企業と活動の実践者にお話を伺いました。

開催日時 2024.3.17日 13:30～18:00@生活工房

参加者 会場 52名/オンライン213名

1.「KOMAZAWA MOAI FARM から始まる駒沢のまちと駅のこれから」

登壇:株式会社イマックス、東急電鉄株式会社

2.「下北沢で働く～誰かのやってみたいが街とつながるワークプレイス～」

登壇:株式会社ヒトカメディア、株式会社はこばん、京王電鉄株式会社

3.「公共施設を核とした新たなコミュニティづくり」

登壇:さくら花見堂の会、まもりやまテラスの会、株式会社世田谷サービス公社

4.「企業と市民が連携した『緑の基軸づくり』～下北沢の事例から」

登壇:一般社団法人シモキタ園藝部、小田急電鉄株式会社



実行委員によるイベント

- ◆ギャラリートーク 毎週末 13:00～展示解説案内を開催しました。計 12 回
- ◆展覧会に関連した企画を実行委員がさまざまな団体と連携して開催しました。
 - 2.3 ちかくのとーく vol.06 世田谷の住民参加とまちづくり
 - 2.25 公開資料整理会 特別編①勝手にギャラリートーク
 - 3.6 まちづくりワークショップの未来
 - 3.10 公開資料整理会 特別編②林泰義さん追悼企画
 - 3.20 都市デザインフォーラム 2024 地域風景資産のこれまで×これから
 - 3.23 住民参加でつくってきた太子堂のまちを歩こう！
 - 3.23 ボードゲームとまちづくりの関係
 - 3.24 ユニバーサルデザインとアーバンデザインの未来を考える
 - 4.13 公開資料整理会 特別編③都市デザイン室の仕事
 - 4.14 みんなでお散歩ゼミナール マップ DX アプリ編

ブックフェア

展覧会関連書籍販売でご協力いただきました。

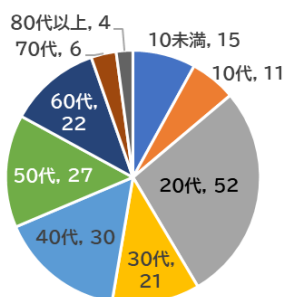
本屋 B&B | 紀伊國屋書店 新宿本店 | TSUTAYA 三軒茶屋店

来場者数・来場者の声

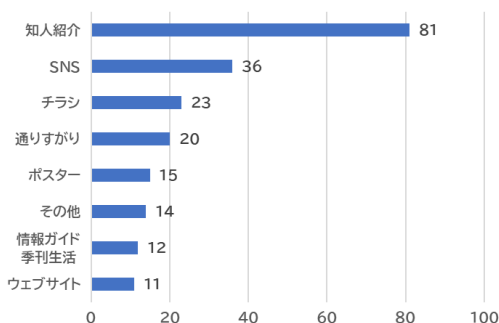
来場総数 18,250名

会場アンケート回答数 190件

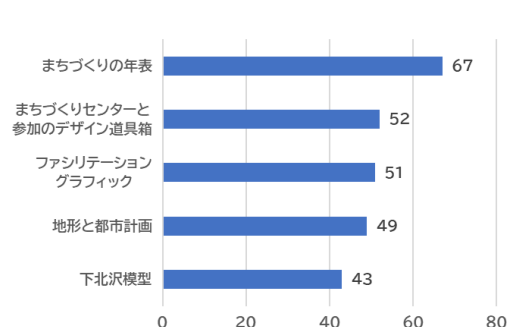
回答者属性 年齢



展覧会を何で知ったか



特に印象に残った展示



アンケートコメント(抜粋)

- ・環境問題とかスケールの大きい社会課題に対して自分ごと化することが求められているが、それを解決(身近に、自分ごとを感じる)する手法は、地域・地域に密着したり地域に視点を置くことだと思いました。[20 代区内]
- ・国や市という見えない組織でなく市民という近い存在がまちづくりに関わっているのだと驚いた。[20 代区外]
- ・小さなデザインから 1 つ 1 つ市民とともにつくりあげようという意識が伝わってきました。神戸のまちづくりでも、その気持ちを忘れないよう続けていきたいです。[40 代区外]
- ・様々に変わりながらも続き、つながっていく世田谷のまちづくりの大切さを感じた。[60 代区内]
- ・昔の議論の記録が豊富に残っていてすごい。[30 代区外]
- ・学校からはじまるなんて聞いたことがなかったから心に残った。[10 代未満区外]
- ・模型で学校の社会をおもいだしてもっと社会を知りたくなった。[10 代未満]
- ・ファシリテーショングラフィックが、デジタルが重視される現代において斬新なアイデアだと思った。[20 代区外]
- ・宮の坂駅は中高 6 年間毎日歩いていたので、そのような流れの中でつくられてきたものと知り、大変心に残りました。[30 代区内]
- ・世田谷に住んでいて誇りと未来への期待が持て、これまでまちを作ってきた皆さんに感謝したくなりました。[40 代区内]
- ・育ってきた世田谷を改めて知ることができました。自分の好きなのところのキャッチコピーがとても共感できて感動した。[20 代区内]
- ・デザインとまちづくりのつながりや自分の仕事を通じたまちづくりの可能性を感じました。モチベーション高まりました。[30 代区外]

オープニングセレモニー 2024.1.30



アドバイザー会議

協賛いただいた企業様に、展覧会アドバイザーとして、展示内容やPRに関するご意見をいただきながら準備を進めました。

-アドバイザー企業様-

小田急電鉄(株)、京王電鉄(株)

(株)世田谷サービス公社、東急(株)



謝辞

展覧会「世田谷のまちと暮らしのチカラ～まちづくりの歩み 50 年」が無事に閉幕いたしました。世田谷のまちづくりを一望しようと企画した展覧会ですが、準備の過程、そして開催中に多くの方にご協力をいただき、そこから今後の世田谷のまちづくりの基礎となるものと、新たな広がりが作り出されたと考えています。このプロセスもまた、まちづくりだったのではないのでしょうか。ご協力をいただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

世田谷まちづくり展 実行委員長 饗庭 伸(東京都立大学都市環境学部 教授)

協賛 小田急電鉄株式会社 | 京王電鉄株式会社 | 株式会社世田谷サービス公社 | 東急株式会社

助成 公益財団法人東京都都市づくり公社

後援 世田谷区 | 世田谷区教育委員会

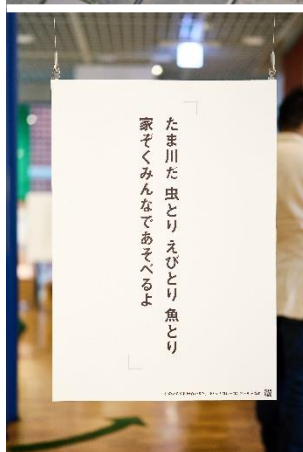
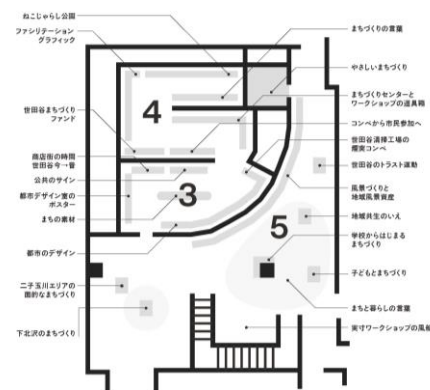
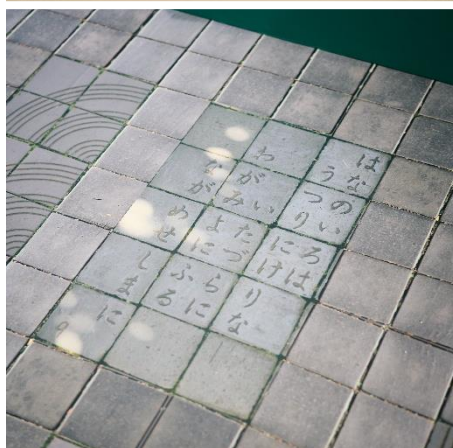
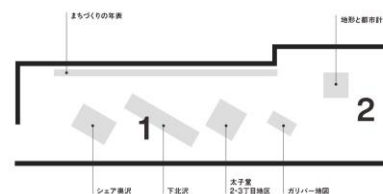
模型製作協力 東京都市大学 | 東京都立大学 | 東洋大学 | 武蔵野美術大学

広報協力 イッツ・コミュニケーションズ株式会社 | 株式会社ジェイコム東京 | エフエム世田谷

展示グラフィックデザイン 株式会社 LABORATORIES

展示資料協力

遊べ！子どもたち編集委員会、あばら屋 春夏、在林館、一般社団法人イヴの木、いらか道市民緑地ボランティア、岡さんのいえ TOMO、岡本緑地ボランティア、一般社団法人おやまちプロジェクト、崖線みどりの絆・せたがや、烏山みずとみどりの会、記憶をつなぎ人をつなぐ世田谷区庁舎をのぞむ会、北沢川文化遺産保存の会、紀伊國屋書店新宿本店、終堂五丁目特別保護区ボランティア、NPO 法人子育て支援グループ amigo、駒沢給水塔風景資産保存会、こもれびの庭市民緑地ボランティア、さくら花見堂の会、雑居まつり実行委員会、有限会社七月工房、一般社団法人シモキタ園藝部、下北沢 リンク・パーク、社会福祉法人せたがやの木会上町工房、世田谷区北沢総合支所地域振興課、世田谷区北沢総合支所街づくり課、世田谷区世田谷総合支所街づくり課、世田谷区商店街連合会、世田谷区都市計画課、NPO 法人せたがや子育てネット、一般財団法人世田谷コミュニティ財団、世田谷実践室、世田谷線とせたがやを良くする会、世田谷パブリックシアター、世田谷風景じゅく、世田谷マップDXプロジェクトチーム、株式会社象設計集団、竹山ボランティア、玉川町会、NPO 法人玉川まちづくりハウス、ツングステンズ、読書空間みかも、都市森林株式会社、野沢正光建築工房、場所づくり研究所ブレイス、日立造船株式会社、深沢・桜新町さくらフォーラム、一般社団法人二子玉川エリアマネジメント、二子玉川商店街、株式会社ふたこ麦麦公社、ふたこのよいこサポート隊、futakoloco、船橋小径の会、認定 NPO 法人プレーパークせたがや、プレーリヤカーKOPAN、Pollinators、本屋B&B、まもりやまテラスの会、せたがや水辺の楽校、らくらくハウス、LABORATORIES、浅海義治、朝比奈ゆり、在塚礼子、市原尚子、伊藤雅春、稲垣道子、岩崎遊、上原幸子、卯月盛夫、梅津政之輔、大橋慶子、荻原礼子、奥村玄、及部克人、笠原徳広、木下勇、小池良実、小塚秀忠、小西玲子、小林直子、佐谷和江、嶋田幸男、鈴木理英、鈴木立也、隅田文子、関郁代、田行礼奈、寺島薫、富田玲子、中村輝之、中村昌広、温井克子、花形静雄、春井裕、林泰義、福永順彦、藤井梨江、藤木和人、堀内正弘、若井寿満子、町田恵美子、松本篤、みぞぐち かずま、宮地成子、村上ゆか、安田宏子、湧口善之



世田谷まちづくり展実行委員会

特別顧問 保坂展人(世田谷区長)

実行委員長 饗庭伸 | 副実行委員長 男鹿芳則

実行委員: 青木徹、浅海須美子、市川徹、小山弘美、齋藤啓子、白鳥奈緒美、橋たか、千葉晋也、濱直明、伊東陽菜、伊藤若菜、小山萌絵、譚林宣

事務局: (一財)世田谷トラストまちづくり[小柴直樹、風間委文子、菊地直人、亀屋美和] (公財)せたがや文化財団生活工房[福岡綾子、大竹嘉彦、佐藤史治]

写真 澤木亮平 | 小柴直樹

編集・発行 世田谷まちづくり展実行委員会

発行日 2024年5月15日